人の歌仙清原元輔女にて、其家の風吹傳へたりける上、心さま優にて、折につけたる振舞いみじき事多かりけり、

〔源氏物語二十槿〕時々につけても、人のこゝろをうつすめる、花もみぢのさかりよりも、冬の夜のすめる月に、雪のひかりあひたる空こそ、あやしう色なき物の身に玄みて、此世のほかのことまで思ひながされ、おもしろさも哀さも殘らぬおりなれ、すさまじきためしにいひをきけん、人の心あさゝよとて、みすまきあげさせ給、〇下略

〔好古日錄末〕織簾

寶曆間一女子アリ、其母一故家ノ女ニシテ、物語ノ葉子若干卷ヲ藏メ、常ニ此ヲ讀シム、女子强記輙ク讀テ其辭ヲ記憶シ、常言往々古詞ヲ用ユ、簾ヲ編ヲ、ミスヲ織ルト云シガ、何ノ書ニ出タルニヤ、所出ヲ問ントスルニ、早世ス、按ニ國史補ニ、門簾以粗竹織成、不加緣飾トアレバ、古昔此間ニテモ織ト云シナラム、

〔見た京物語〕遊女體の居る廳に懸る簾、布交せの如く墨にて横筋をぬりてあり、もやうに矢の羽などぬりたるあり、

〔遊京漫錄上〕奈良の藥師につたへたりし、唐簾のいともふるきを得てよめる、　濱臣

もろこしのみぬ花鳥のあやすだれあやしや千世の物をわが得し

清水大人の都にて得給ひぬとて、花鳥のかたいとおかしく物したる、古きすだれを見せ給ひければ、　茂雄

花鳥ののこるにほひのあやすだれかけて玄のびし昔をぞみる

〔俚言集覽須〕すだれあけ　越後國は雪國にて、初冬より暮春迄は、町々宿々の門口簾をたれて降雪をふさぎおり、やう〳〵八十八夜の比より雪もふらずなりて、初めて簾をあげて商ひをひら